

## 大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした 地域歴史資料学の構築

Creation of Local Historical Document Studies  
based on theory of Historical Materials Preservation  
at the time of large-scale natural disasters

奥村 弘 (OKUMURA HIROSHI)

神戸大学・大学院人文学研究科・教授



### 研究の概要

地域社会の急激な構造転換に加えて、地震や水害などの大規模自然災害が続発し、日本の地域社会で維持されてきた歴史資料は滅失の危機にあります。被災各地における歴史資料の保存・活用実践を研究し、豊かな歴史認識をもったコミュニティの再生と災害に強い地域社会を確立するための方法論としての地域歴史資料学を構築します。

研究分野：人文社会系・人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：史料研究、地域歴史資料学、被災歴史史料保全論、震災資料、史料防災

### 1. 研究開始当初の背景

現在、コミュニティの危機に端的に現れているように、地域社会の急激な構造転換の中で、日本の地域社会で維持されてきた膨大な地域歴史資料は滅失の危機にあります。さらに活動期を迎えた地震による災害、地球温暖化に関連する大規模風水害の続発は、この事態を早めることになりました。阪神・淡路大震災以降の大災害時における歴史研究者による歴史資料保全活動の継続的展開の中で、指定文化財を基本とした歴史資料保存や、地域住民による保全に依拠するのみでは、地域歴史資料の保全が不可能であることが明確になったのです。この危機的状況を放置するならば、地域社会の歴史を明らかにし、歴史研究を発展させることは著しく困難となるでしょう。

### 2. 研究の目的

本研究では、地域歴史資料を巡る問題が集約的に問われた被災各地で、その保全に当たった歴史研究者を中心に、各地域での歴史資料の現状を現地での再調査や関係者等との共同討議等から把握し、データとして相互に共有します。これを基礎に、これまでの歴史資料学の研究蓄積や国際的な歴史資料学の成果を利用して、さらに歴史学に隣接する文化財保存科学、建築史等の協力も得ながら、各地で生まれた歴史資料保全論や萌芽的な地域歴史資料学について比較検討を行います。その中から、緊急の課題となっている地

域歴史資料を次世代に引き継ぎ、地域住民の歴史認識を豊かにしうる、地域歴史資料学を構築することを目的としています。

### 3. 研究の方法

本研究では、新たな地域歴史資料学を構築するために、各地の大規模自然災害による被災地の歴史資料保全論に焦点を当てます。なぜなら、災害時には地域における日常時の史料保全の有り様が、最も直接的に現れるためです。そこで、①被災地を中心に形成されてきた個別の歴史資料保全論を総括し、現地での調査・ワークショップを含めて集中的に検証するという手法を第一に採ります。ここでは、被災各地の歴史資料論から、地域歴史資料を巡る地域社会の状況と、地震や洪水等の災害の在り方や、災害後と災害前（予防）での史料保全の差異を具体的に把握するとともに、そこから生まれた被災各地の歴史資料保全論の特質を究明します。

その上で、②この歴史資料保全論が歴史資料学の展開の中でいかなる位置にあるのかを把握するとともに、③地域文化財の全体の中で地域歴史資料の位置を建築史や美術史の協力により明確にします。さらに、文化財保存科学による被災史料の修復等に関して、特に水損した紙資料に対する新たな技術を基礎としながら、緊急事態における科学的な歴史資料の保存に具体的に対応することによって、次世代の歴史研究を支える新たな地

域歴史資料学の構築を目指します。

#### 4. これまでの成果

大災害が続発するなかで、日本の歴史文化とその基礎をなす地域歴史資料の保全は危機的な状況にあります。しかし、地域に残る歴史資料の保全と活用を歴史学の課題として捉え、地域歴史資料学として学問化していく方向性を提示できたことは、歴史学の基礎分野となる歴史資料学の確立に学術的に貢献することとなったと考えます。

今後、かならず起こる地震や津波等から、地域歴史資料を具体的に守る方法や技術を専門家だけでなく、地域住民が自ら行える形で提示することは、地域歴史資料を1000年にわたって保存していくために極めて重要です。東日本大震災では、地域歴史資料に災害も含めた地域の歴史が刻まれており、それを保存・活用していくことが地域住民の生活とも深くかかわることも明確になりました。また、住民の記憶にかかわる写真や文書ががれきりの中から取り出され、これらも含めて未指定の文化遺産として保存することが社会的な通念となりましたが、本研究は、このような歴史文化のあり方を学術的に支える役割を果たしております。本研究が、地域歴史資料学の学問的確立を前提としながら、その社会的な意味を体系的に伝えることができたことは、地域レベルでの減災・防災上大きな意味を持つだけでなく、地域住民がコミュニティの核として地域の歴史文化を維持・発展させていく上でも重要な意味を持ったと考えます。

地域社会における記憶と歴史文化の継承をはかるといふ問題は、日本のみならず、現代においては世界的な課題となっており、この点において本研究は、自然災害が多発する日本の困難な状況を逆手にとって、地域歴史資料学を構築し、これを世界に発信するとともに、世界各地の地域歴史資料の保存や継承についての比較研究という新たな歴史研究の手法を開拓するもので、この点において国際的にも注目されています。

#### 5. 今後の計画

今後は、これまで3年間の基礎研究、ならびに東日本大震災に際して進められた歴史資料保全活動から得られた地域歴史資料の保全にかかわる新たな知見を基礎として、地域歴史資料学の中間的な試案の内容を深めるとともに、広域災害にも対応しうる地域歴史資料の防災対策について学問的指針の提示を行います。

全体としては、新潟・岡山を中心として進められてきた、緊急時・平常時の史料防災の現状と課題を共有し、緊急時には複数分野の研究者、多様な資料所蔵機関関係者が円滑に連携し、広域災害から効果的に歴史資料を保

全する体制のあり方について研究を展開するために、新潟・岡山でフォーラムを開催し、その事例を分析します。

さらに、国際的な比較研究と情報発信の点については、ICA関係者と打ち合わせをおこない、翌年の国際シンポジウムの準備を進めます。

また、2011年3月11日に発生した東日本大震災により、特に東北地方の地域歴史資料が甚大な被害を受けており、救出を必要とする被災歴史資料も依然多数あります。本研究では、この地震で被害を受けた歴史資料を効果的に保全していくための経験と、そこから析出された方法論を研究に反映させていくために、被災歴史資料をとりまく状況についてのデータ収集を継続して行います。そのなかで被災歴史資料の保全活動についての関係諸学会・諸団体の動向に関する記録を蓄積し、現地調査についても研究分担者と協力しながら、状況に応じて展開していきます。

さらに、研究分担者を中心に、文化財保存科学研究者とも協力して、水損歴史資料を中心に、真空凍結乾燥やすきばめ技術を援用しつつ緊急事態に対応しうる科学的な歴史資料保存方法を地域歴史資料学に組み込むための研究も継続して行います。

平成25年度は、東日本大震災での知見を加えて、これまでの研究を総括し、地域歴史資料学の構築に向けて、その成果を国際的に発信するために国際シンポジウムを開催する予定です。

#### 6. これまでの発表論文等(受賞等も含む)

- ・奥村弘『大震災と歴史資料保存－阪神・淡路大震災から東日本大震災へ－』、吉川弘文館、pp.1-217、2012年
- ・奥村弘「東日本大震災と歴史学－歴史研究者として何ができるのか－」『歴史学研究』884号、pp.16-21、2011年
- ・平川新「東日本大震災と歴史の見方」『歴史学研究』884、pp.2-7、2011年
- ・矢田俊文「中世・近世の地震災害と「生きていくこと」」『日本史研究』594、pp.39-51、2012年
- ・矢田俊文「東日本大震災と前近代史研究」『歴史学研究』884、pp.12-15、2011年
- ・松下正和「災害文化の継承に向けて」『歴史科学』204、pp.14-25、2011年

ホームページ等

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~area-c/area-c@lit.kobe-u.ac.jp>